



岡田英弘 (1931-2017)

本書を編むにあたって、著作集に収録済みの岡田の文章と私の解説だけでは、新しい本にするには物足りないと考え、京都大学文学部の私の同級生で、モンゴル語と一緒に学んだ言語学者、樋口康一・愛媛大学名誉教授に終章の執筆をお願いした。樋口氏は、言語学者から見た漢字論や、ユーラシア大陸における文字の変遷など、興味深い論を展開してくれたので、本書刊行の意義も高まった。岡田も喜んでいるに違いない。

最初に、シナ(中国)における漢字の役割を理解するために、岡田の中国文明

論を概説しようと思う。歴史上、「中国」という名前の国家は、一九二二年の中華民国まで存在しない。紀元前二二一年に天下を統一した始皇帝の「秦」が、「漢訳大蔵経」に記された音訳の漢字「支那」、そして英語の「China」の語源である。であるから、正確を期すなら、一九二二年以前は「中国」ではなく「シナ(チャイナ)」と呼びたいが、戦後の日本ではChinaを「中国」と翻訳してきたから、目くじらを立てても仕方がない。岡田自身の一般書も『中国文明の歴史』(講談社現代新書)という題名である。

さて、秦の始皇帝による文字の統一は、「口頭で話される言語」の統一ではなく、「漢字の書体」とその漢字に対する読み音を一つに決めたことだった。その結果、読み音は、漢字の意味を表す言葉ではなく、その字の名前というだけのものになった。このあと二千年以上、シナ文明では、文字と言葉は乖離したままだったのである。

漢字にルビがふられるようになったのは、一九一八年、中華民国教育部が、注音字母(ちゅういんじふ)という、カタカナをまねた表音文字を公布したのが始まりである。これが、口で話し耳で聴いてわかる言葉としての中国語の第一歩だった。

それまで長い間、シナには共通の話言葉はなかった。読み音が地方によってばらばらである漢字を使いこなすためには、一つずつの漢字が持つ意味がわからなければならないが、それを説明する文字はない。だから、漢字を習得するためには、古典の文章をまるごと暗記し、文脈を思い出しながら使うしかない。儒教の経典である「四書五経」が、国定教科書になったために、科挙を受験するよう

歴史家、岡田英弘が鋭く見抜いた、「漢字」の用法の特殊な事情とは。

漢字とは何か

——日本とモンゴルから見る——

宮脇淳子

なぜ本書を編んだか

岡田英弘は歴史学者である。その守備範囲は幅広く、漢籍を史料としたシナ史から現代中国論、シナを取り巻く朝鮮、満洲、モンゴル、チベットの歴史と文化、日本の学校教育における世界史の枠組みの見直し、大陸から見る古代日本など、学問分野は多岐にわたる。しかもすべての分野において、これからも後進に影響を与え続けるだろう画期的な業績を残した。二〇一六年に完結した『岡田英弘著作集』(藤原書店)全八巻はその集

大成である。

本書の編者である私は、京都大学文学部を卒業後、大阪大学大学院在籍中の一九七八年に二十代で弟子入りしてから二〇一七年五月に岡田が満八十六歳で逝去するまで四十年近く、途中からは妻として生活をともにしながら、間近でその学問を学んだ。

二〇二〇年一月から藤原書店のPR誌『機』に、岡田のシナ学に基づいた短いエッセイ「歴史から中国を覗く」の連載を始めた私に、藤原良雄社長から呼び出しがかかった。中国人にとつての漢字が、

日本人にとつての漢字とはまったく異なるものであること、これこそが、日本の文化と中国の文化の決定的かつ根源的な違いであり、言葉がなければ概念はその言語社会に存在しない、という岡田の理論を、私は説明した。藤原社長はその内容に感嘆し、岡田の漢字論がまだほとんど世に理解されていないことを惜しんで、著作集からその部分だけを抜き出し、一書として世に問うことを決めた。それが本書である。

シナチャイナの誕生と

漢字の役割

本書は、著作集ではいくつかの巻に分かれていた論説を、シナにおける漢字の歴史、日本語の影響を受けた現代中国語と中国人、日本における仮名の誕生その他について、三章に編集し直した。

なひとにぎりの知識人は、これを丸暗記し、その語彙を使って文章を綴った。そのために漢字を使う人びとが儒教徒に見えたのであって、儒教が宗教として信仰されたわけではない。

「漢字」学習の困難と、利点

文字が漢字しかないということがシナ人（中国人）にとって何を意味したか、ふりがなのまったくない漢字を勉強するということがどういうことかは、日本人の想像を絶する。私の知っている限り、このような見方をした日本の東洋史学者は岡田以外にはいない。なぜこんなことがわかったのか、今もお不思議に思う。漢文は、日本人やヨーロッパ人が考えているような「言葉」ではなく、「中国語」の古典でもない。漢人にとって漢字を学ぶのは、外国語を使って暗号を解読する

ようなものである。

漢文は、漢人の論理の発達を阻害した。どういふことかという、表意文字の特性として、情緒のニュアンスを表現する語彙が貧弱なために、漢人の感情生活を単調にした、ということである。

漢人にとって、自分が話すとおりに書くことは極端に困難であって、まず絶望的と言ってもよい。また、もし仮にこれができるとしても、その結果は、きわめて難解な、おそらく当人以外には読めないようなものになる。だから、日常の自然言語から遊離した語彙と文法を学んでこれをマスターしなければならぬ。

文字のほうが圧倒的に効果的な伝達手段であるため、言語が文字に圧迫され、侵蝕され、その結果、感情や思考の表現力が劣り、結局は精神的発達が遅れることになる。だから、古くから仮名文

字を発達させ、おかげで国語による表現力にそれほど大きな個人差のない日本人と違って、漢人のあいだには一見、知能の極端な個人差が存在するらしく見える。これはじつは漢字の世界へのアクセスの差なのである。

それでは、漢字の使用方法を完全にマスターしたエリートである「読書人」にとって問題はないかというと、これがまたそうではない。彼らがなにことを文字によって表現しようとすれば、儒教の經典や古人の詩文の文体に沿った表現しかできないからである。

教育程度が高ければ高いほど、文字によるコミュニケーションの領域が拡大して、音声による生きたコミュニケーションの能力が低下する。漢字を基礎としたまったく人工的な文字言語が極端に発達したため、それに反比例して音声による

自然言語は貧弱になってしまった。

しかし、見方を変えると、漢字のこの性質は、異なる言語を話す維多利亞集団にまたがるコミュニケーション手段としては最適であって、全人類の四分の一にのぼる巨大な人口を、一つの文化、一つの国民として統合することは、漢字の存在なくしては不可能だった。

文字と言葉と感情

さて、岡田の漢字論・シナ文化論については、日本の知識人ほとんどが同意し、最近では海外の中国社会でも盛んに翻訳されているが、本章の「日本語は漢語を下敷きにして人工的につくられた」という岡田の論は、日本の保守系文化人には嫌う人が多い。漢字の影響を受ける前から、話し言葉としての日本語は厳然とあった、と思いたいからである。

しかし、岡田が引用している高島俊男

氏の説明にあるように、漢字が日本に入ってきた当時の日本語は、「雨」「雪」「風」とか「暑い」「寒い」などの具体的なものを指す言葉はあっても、「天候」「気象」など、それらを概括する抽象的な言葉はなかった。

言葉がなければ、その言葉が指し示す概念はその言語社会には存在しない。人間の感情も、言葉によって規定されているのである。

話し言葉を文字に写すことで書き言葉がつくられるのではない。書き言葉を学ぶことで話し言葉がととのえられてゆくのである。一般に、人間は文字を通して学ばなければ、言葉を豊かにはできない。

（序章より抜粋／構成・編集部）

（みやわき・じゅんこ／東洋史学者）

漢字とは何か

日本とモンゴルから見る

岡田英弘

宮脇淳子 編・序／特別寄稿 樋口康一

四六上製 三九二頁 三五一〇円

岡田英弘著作集 全8巻

四六上製 各巻四三〜六九六頁

- 1 歴史とは何か 〔4刷四一八〇円〕
- 2 世界史とは何か 〔3刷五〇六〇円〕
- 3 日本とは何か 〔3刷五二八〇円〕
- 4 シナ（チャイナ）とは何か 〔3刷五三九〇円〕
- 5 現代中国の見方 〔2刷五三九〇円〕
- 6 東アジア史の実像 〔2刷六〇五〇円〕
- 7 歴史家のまなざし 〔附〕年譜／全著作一覧 七四八〇円
- 8 世界的ユーラシア研究の六十年 〔残部僅少〕九六八〇円